

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2015年 春号 4月8日発行 通巻56号
発行人：竹内 章（府中市分梅町）
TEL 042-364-3428

第10回 田んぼの学校

田んぼの学校も府中市民に定着し記念すべき10回目を迎えました。開校当初はイネ栽培を学ぶ小学校高学年を想定していましたが、現在は子どもに自然体験、農業体験をさせたい親が多くなり、親子で農作業体験や生き物さがしに参加する低学年のお子さんが多くなりました。

田んぼは米をつくるだけではなく、そこにはトンボやカエル、ザリガニなど様々な昆虫等が棲息し、また太陽の大事さを体感させてくれます。

田んぼの学校は農作業を通して身近な自然に触れる、親子で一緒に体験できる、自宅ではバケツ稲の生長を親子で観察し、何かを感じ、気づくことを特色としています。

昨年は東京農工大生に加えて、都立府中東高校生物



昨年の田植えの光景

部の高校生が参加し、応援してくれましたが、今年は強力なスタッフとして最初から連携して進めたいと思います。

募集要項

- △期 間 5月31日～11月8日の日曜日(全5回)
午前9時～正午 雨天でも実施
- △場 所 東京農工大学本町農場(本町3の7)
- △対 象 小学生以上の方
小学3年生以下は保護者同伴
- △定 員 40名(抽せん)
- △費 用 1,000円(材料費)
- △内 容 田植え・稲刈り体験と生きもの観察ほか
- △申込み 5月9日(必着)までに、往復はがきに氏名(ふりがな)、住所、年令、学年、電話番号を記入して府中かんきょう市民の会・五十嵐四郎あてへ(〒183-0054 四谷1の44の3)
- △問合せ 環境政策課 環境改善係(335-4196)

年間スケジュール表

| | |
|---------------|--------------|
| 第1回 5月31日(日) | 開校式・田植え・バケツ稲 |
| 第2回 7月5日(日) | 生き物さがし・草取り |
| 第3回 9月27日(日) | イネ刈り・ハサかけ |
| 第4回 10月11日(日) | 脱穀・モミすり |
| 第5回 11月8日(日) | 収穫祭・修了式 |

第15回 レンゲまつり

4月25日(土) 午前9時30分～午後1時
場所は押立1丁目の田んぼ



府中東高校生物部によるバルーンアートづくり

- 花飾りあそび ●布ぞうり作り ●コマ作り
- 草笛作り ●シャボン玉遊び ●バッタ作り
- あおぞら劇場「草笛の演奏」「バルーンアート」「南京玉すだれの実演」
- 府中産蜂蜜と野菜の販売
- 都立府中東高校生物部の展示
- 府中子ども劇場「南京玉すだれの体験」
- 写真展示 「府中 農ある風景」
- 東日本大震災募金

(会場図)



- ★レンゲまつりは、公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団から助成を受けています。
- ★25日が雨天の場合や足元のコンディションが悪い時は、翌日に順延になります。
- ★イベントの内容および出展団体が変わる場合があります。

主催：NPO法人 府中かんきょう市民の会
後援：府中市

"援農"から都市農業を学ぶ

"援農"と呼んでいるボランティアに、ボクはもう10年以上関わっている。

都市開発が進み、府中の農家が年々減少して行くなか、これを食い止め、高齢の農家を支援する側と、来てもらいたい側の農家の希望が一致して"援農"が成立する。

10月下旬のある日、ボクは調布市との境に近い押立地区のAさんへ"援農"に出かけた。前日から雨が降り続いており、カッパを着て自転車で出かけた。

この日の仕事はハウス内の枯れたキュウリの撤去だった。この仕事は以前にもやったことがあったが、キュウリの蔓はハウス全体に枝を伸ばして成長していた。

同じ作業を以前にも経験したが、収穫後に立ち枯れたキュウリは乾燥しきって、触ると粉々に砕けて、その細かな粉末が口や鼻から気道に入り込み、やたらと咳き込んだ覚えがある。

しかし今回は、前日の雨で湿度が高く、立ち枯れキュウリは粉々にならず、やや湿気を帯びており、作業するのにおあつらえ向きだ。それでも用心のため、ポケットからマスクを取り出し、口と鼻を覆う。

Aさんは、ハウスいっぱいに広げたキュウリの蔓を支えていたネットを再利用したいので、複雑に絡んだキュウリの蔓を鋏で切り、ネットから外すというやっかいな仕事になるが、彼はいちいち細かな指示を出さない。ボランティアの方は長年の勘と経験で、Aさんはなにを望んでいるかを先回りして瞬時に判断して、取りかかる。この作業をしていると、腰が痛くなったり、腕が痛くなったりする。

仕事は、まだ終わらない。続きの仕事は、畝を覆っているマルチ(保温カバー)の取り外しだ。マルチは枯れ枝の撤去の際に苗穴が裂けたりして、使い物にならない状態になっている。通常は1回の使用で破棄される運命だ。



マルチと敷きワラ(左)で冬支度。完成(上)



このマルチの撤去だが、これをやる前にもちよとしたコツがある。勢いよくカバーをめくりあげて行くと、必ず、土埃が舞い上がる。その前にハウスの両端の戸を開けて、風通しを良くしたうえで、静かにめくろうと声をかけてやると、土埃はかなり防げる。

別の日の11月末の"援農"。この日は、ハウスの冬に備えての準備だ。Aさんのハウスでは、冬の生鮮野菜の供給のために、例えば、トマトを栽培している。夜にはハウスを灯油で暖房して、気温が下がらないように工夫しているので、一晚3000円の燃料費がかかるという。消費者が燃料費込みの少し高めトマトを要求するからだ。

この日の作業は、この燃料費を少しでも安く抑えるためのAさんならではのやり方を、実際に進める。このAさん方式では、夜間に気温が下がってハウス内の温度も下がるのだが、そのハウス内温度が数度低下するのを食い止めることができるという。結果、燃料費の節約につながり、出荷価格を少しでも抑えられるという。

実際にどうするか。まず、ハウス内の通路部分に、使い古したマルチ(保温カバー)を敷き詰める。マルチは畝の気温を保つ効果があり、ハウスだけではなく広く露地栽培でも利用されている。その破れたりして破棄する古マルチを敷き詰め、夜間の気温低下を防ぐのだ。さらにその上にワラ束をほぐして、敷く。これも同じ理屈で、地面に毛布を懸けてやる要領だ。

ボランティアがこの目的をよく理解していないと作業が機械的となり、例えば、ハウスの外側から入り込む冷気を古マルチで防ぐといった作業を思いつかない。

"援農"をやっていると都市農業のありかたやAさんの苦労話が聞けて、勉強にもなる。AさんはJAの販売所に野菜を出荷している。朝9時に開店する行列に並んで、Aさんのトマトを見つけた時は、ボクもこのトマトを育てたような気になって、思わず手が出てしまうのだ。(館 浩道)

農薬の安全性について

一般消費者には、無農薬と有機農法への強い関心と信仰がある。しかし、「農薬」の実態については余り知られていない。今回は、農薬問題に詳しい会員の竹田 勇さんに「農薬の安全性」についての話を伺った。(編集部)

農薬とは、“農作物等に悪影響を与える害敵(害虫、病原菌、雑草、野鼠など)を防除する薬剤”と“作物の成長・開花などを制御する成長調節剤”と定義されている。シロアリ、ゴキブリ、シラミ、家ダニ、蚊の防除に使用される薬剤は農薬の中に含まれないが、同一成分が多い。

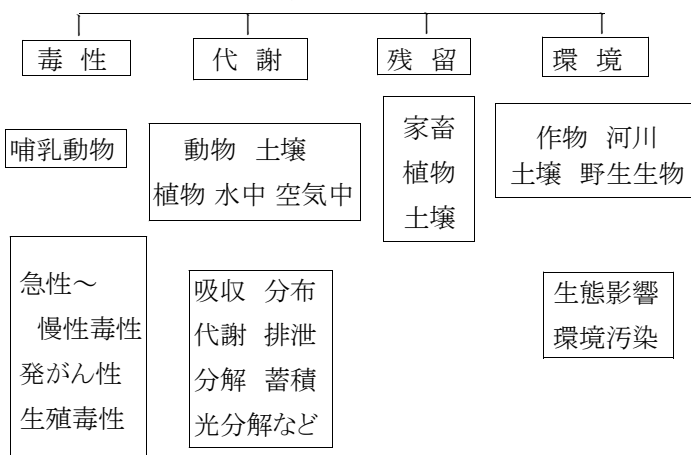
また、有効成分で化学農薬と生物農薬(天敵生物等)がある。化学農薬には、無機農薬、有機農薬(化学構造により有機リン系、カーバメイト系、酸イミド系、ピレスロイド系)に分類されて、総有効成分は480を超える。

そのうえ、用途に応じて殺虫剤、殺菌剤、除草剤、殺鼠剤、植物成長調節剤などと呼ばれる。農薬の商品は、医薬品がそうであるように製剤化され、粉剤、粒剤、乳剤、水和剤、液剤等として市販される。したがって、新聞等の報道記事には農薬の有効成分名を記入すべきである。

市販するには、農薬登録が必要で、登録番号が入った商品でなければいけない。登録を取得するには、効果、安全性(短期、長期の毒性、残留性、生態毒性、)をパスしなければならない。これらのデータからラベルに記載する使用方法、注意事項が決められる。ラベルに準じた使用であれば、使用者、作物、消費者に安全であるというわけである。間違った使用をしたため、残留基準をオーバーして、川魚が死ぬなどの場合は使用者が罰せられる。

通常化学農薬の場合、安全性評価(第1図)に費用と時間を要し(化合物を見つけて10年、10億円を要すると言われる)、より安価に登録を取得できる生物農薬や天然物由来のものが数多く出現して、使用者を悩ませている。しかし、農家が自家製造して使用している資材に安全性に問題がなければ、登録不要とする制度が新設された。

第1図 農薬の安全性評価



この安全性評価に用いる各種の試験は、科学的に高水準で、客観的に信頼性確保されたものが必要である。しかも、国際機関でオーソライズされたものを採用し、GLP (Good Laboratory Practice)制度を導入している。それ故、データはどの国でも採用されるシステムになっている。

安全性の評価

1. 生産、流通過程での取扱者、散布者、周辺住民(中毒事故を避ける)
2. 適用作物、周辺作物(農作物への害を未然に防ぐ)
3. 一般消費者(農産物や飲料水に残留した農薬による人の健康被害をなくす)
4. 環境(河川、土壌や大気を汚染して、環境中に生息する有用生物に直接被害を与えたり、それらの生物を通じて人の健康に被害を及ぼさないよう)

左図のデータを基に農水省、厚生省、環境省の審議会、調査会、委員会、検討会で学術専門家、有識者で評価・審議される。その結果を信用し、信頼を寄せよう。

農薬はPesticideと英語でいうが、もうひとつの表現はEconomic Poisonと呼び、対象とする農作物の価格を超えない売価であることを指している。使用者は過剰に使用したりはしないのが普通である。

農薬のことを正しく知ろう



梅津憲治著 『農薬と食の安全・信頼』

農薬は怖く発がん性があるなどは、レイチェル・カーソン著『サイレントスプリング(沈黙の春)』以降、定着した感がある。市町村の農業振興計画でも大半は“有機農法”を奨励している。保健所の残留農薬チェックで検出される農薬は0.2～0.4%で、基準を超える頻度は0.001～0.03%程度である。

農薬中毒事故で死亡者はなく、食中毒農薬の多くは、とうがらしの辛味成分やたばこのニコチンより毒性が低い等々を知って、農薬は怖いと言っているのだろうか。

一般消費者や大学生の質問に答える形で出版された、上記の梅津憲治著『農薬と食の安全・信頼(Q&Aから農薬と食の安全性を科学的に考える)』の購読を勧める。

また、下記の「(社)緑の安全推進協会」に問い合わせれば、農薬の安全性等について教えてもらえる。

(☎) 03-5209-2511

(HP) <http://www.midori-kyokai.com>

(竹田 勇 日本農薬学会終身会員)

西府崖線
湧水保全チーム 2題

1. 西府崖線 探鳥会

府中かんきょう市民の会「西府崖線湧水保全チーム」の従来の活動は、清掃活動(春秋の年2回)、樹木名札づけ作業(現在72本取り付け)、わき水まつり(パート1、2)、キツネノカミソリ保護活動(本宿町緑地。夏には観賞会開催)、西府町わき水の水量(毎月)・水質検査(年2回)などであるが、今年度はさらに以下の活動を行った。

- 歴史・自然遺産巡り(昨年11月24日)／会報55号に掲載
- 巣箱取付け作業(2月2日)／本号
- 西府崖線探鳥会(2月21日)／本号

(編集部)



日時 2月21日(土) 9:10~11:15

天気 薄曇

場所 西府崖線(ハケ)

参加者 浅田 飯塚 五十嵐 小西 三本 進藤 竹内
田中(香) 牧原 横井 渡辺
計11人(会員8人 一般参加者3人)



参加者記念撮影/あずまや前にて

西府崖線・湧水保全チームが発足して以来初めての野鳥観察会は、暖かい日差しに恵まれました。

あずまやを出発し遠くのケヤキの枝に隠れるように止まっているヒヨドリを観察した後、用水の暗渠で採餌中のコサギを見つけました。

足の指が黄色であることを確認中に「餌の小魚を捕るとき、足を震わせるような動作を繰り返して追い込み獵をするのを見ましたよ～」の参加者の方の声に、皆さんは「面白いな～」と興味をもったようでした。

湧水近くのケヤキの大木に枯れ枝で出来たハシブトガラスの巣を眺め、改めて当崖線の良さを話しながら用水沿いに歩を進めていると、シロハラの声がしましたが姿は確認できません。が、木々の間からシジウカラの賑やかなさえずりが絶え間なく聞こえていました。

大山道を通り、高台になっている崖線で多摩川方面を見下ろしながらいつもこの辺りにいるツグミを探しましたが残念ながら見つかりませんでした。

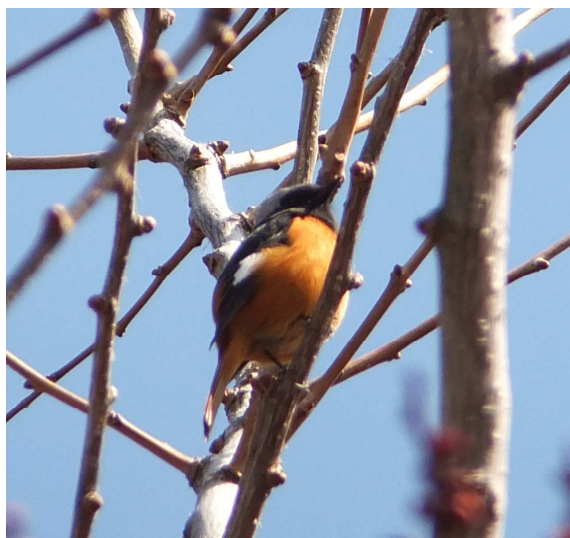
自然林と思われる大木のケヤキ、クヌギ、エノキ、イヌザクラ等に眼をやりながらのんびりと歩き、先日取り付けした巣箱をながめ(写真上)、シジウカラが利用してくれることを願いながら西府文化センター前に到着。

崖に咲いている白梅にメジロが姿を見せ全員で可愛い姿を愛でました。

五小の南庭沿いを下り探鳥会も終わろうとする頃、歩道橋下のフェンスでジョウビタキ(♂)を見つけました。すぐに法輪寺の梅の木に飛び移りましたが、我々が観察している間じっと止まり心ゆくまで堪能さしてくれました(写真下)。

天気にも恵まれ、冬鳥の代表ともいえる鳥(ジョウビタキ)をじっくりと観察も出来、ラッキーな探鳥会でした。

(田中香代子)



- カルガモ キジバト コサギ コゲラ ハシブトガラス
シジウカラ ヒヨドリ ウグイス メジロ ムクドリ シロハラ
ジョウビタキ スズメ 13種

2. 巣箱の取り付け作業

日時 2月2日(月)
 時間 10:00～12:20
 場所 市川緑道・あずまや周辺のハケ
 参加者 8人(市民の会会員7人 一般参加者1人)
 天候 快晴



厳寒のなか、巣箱の組み立て作業を行う。
木洩れ陽さす、あずまやにて

「巣箱づくりとその取り付け作業」は天候に恵まれた。厳寒のなかでも、日向にたたずむとほんのりと温かいくらいだ。市民の会会員7人(内、チームから6人)と一般参加者Iさん(女性)の8人が市川緑道「あずまや」に集まった。市民の会の会員にも初参加の方がいたので全員で自己紹介の後、私が本日の作業工程の説明を行った。

早速、巣箱5個の組み立て作業にはいった。トンカチ、クギ、ドライバーなどを手に、皆さん慣れない手つきで作業をはじめた。トンカチが奏でる「トントン、ガンガン、バンバン」などの音があずまや周辺に響いた。一般参加のIさんも、トンカチを手に巣箱を手際よく作っていた。

自転車に乗った通行人もスピードを緩めて、興味深そうにこちらの様子をうかがっている。また、幼児連れの若い



完成した巣箱を持って記念撮影

お母さんも立ち止ってこちらを見ている。組み立て作業は予想より手間取ったが、約50分で終了した。

設置場所はハケ全体に5か所である。そのため、一定の間隔が必要となる。野鳥に詳しいTさんの指示のもとに適当な樹木をさがして取り付け作業に入った。巣箱というからには、位置が低すぎても駄目で一定の高さが必要となる。さらに、野鳥の出入り口の向きも重要であろう。

市民の会会員で初参加のMさんが、あずまや付近のK酒店で借りた大きな脚立を持ち運んでくれた。そして、みんなで取り付け場所を探した。場所がよくても樹木の形が取り付けに適さなかったり、あまりにも通行人と近い距離にあったり、帯に短し襷に長しといった感である。ハケを行きつ戻りつしているうちに、適当な樹木を見つけた。

しかし、それからが難儀だ。取り付け場所は急傾斜のハケのため、脚立をしっかりと支えてもらい慎重に作業をしなければならない。足元の安定を確かめて、ゆっくりと脚立の段をあがる。



巣箱の取り付け作業

最上段に上がると、清澄な大気のなかに端麗な霊峰富士の姿が目飛び込んできた。いつ見ても感動するが、見惚れている場合ではなく、巣箱を手早く樹木に取りつけた。ヒモは樹木の名札づけのときにも使ったシュロ縄である。シュロ縄は樹木を傷めないからだ。

作業はチームワークのよさもあり、お昼過ぎには終了。作業時間は約2時間20分。その巣箱に数日後、①～⑤の番号をつけて「西府崖線の樹木マップ※」に記した。

今回取りつけた巣箱の1か所でもよいから、野鳥がはいてほしいと願っている。もし、野鳥たちが、かりそめの住まいとして選んでくれたら、こんなうれしいことはない。

(葛西利武)

※「西府崖線の樹木マップ」とは、(鎌倉街道 本宿トンネル横の)本宿町緑地から大山道にいたる崖線(ハケ)の樹木72本に名札をつけた図表である。「ハケ・用水・わき水通信(No.16/平成27.4.10発行)」の2面に掲載してある。

新入会員 自己紹介

牧原文男さんの巻



佐賀県唐津市の出身です(右下写真)。風光明媚なところで高度経済成長の流れで上京し、府中市在住40年を過ぎて66歳と1か月になりました。左の写真は八王子市郊外の畑で、一般的な野菜の他にヤーコンや自然薯等も栽培しています。

会社員時代に仕事上で知った「多摩川水源森林隊」でボランティア活動を経験し、他の森林整備ボランティア活動を社会貢献のひとつとして支援活動をしています。また、定年後は、岩魚・虹鱒の釣り堀の仕事も経験しました。趣味はアウトドア派で、無農薬・有機(勇氣?)栽培で野菜づくりの他にドライブとカメラ及び旅行(海外)が好きです。

座右の銘は、「継続は力なり」です。チャレンジ精神旺盛な気持ち(夢)を持ちながら、自然体で優遊な人生を歩みたいと思います。入会動機は、2年前にボランティア活動展示会(PR)で「畑の学校」のを知り、竹田校長の面談を受けて市川農園(現在は小林農園)での援農ボランティアと畑の学校が始まりです。

そこで入会を勧められていた「府中かんきょう市民の会」の資料を竹内理事長からいただき、幅広い活動内容を知りました。農風景や自然との関わりが好きな皆さまとの縁と思い、仕事をしながらの若輩者ですが入会を決めました。今後は、援農(畑の学校)を主として、楽しく取り組みたいと思いますのでよろしくお願ひします。

◎牧原さんには早速、下記報告文を書いていただいた。

パネル
ディスカッション

援農ボランティアの軌跡

日時 平成27年1月17日(土) 13:30~16:00

会場 日野市民会館(小ホール)

参加者 竹内章 竹田勇 牧原文男

日野市は「日野市農業基本条例」を制定し、農あるまちづくりを進めるために第3次日野市農業振興計画・アクションプランに基づき市民協働の農業振興を進めている。

平成16年度から毎年「都市農業シンポジウム」を行っており、今年には援農市民養成講座「農の学校」10周年を記念して「援農ボランティアの軌跡」のテーマでパネルディスカッションが行われた(配布資料より)。

1.概要

日野市の援農は、「農の学校」に入学して1年間野菜づくりの座学と畑での実技の勉強をして農作業の技能と技術を習得してから援農活動を行うシステムとしている。なお、「農の学校」は土づくりから始めるので1月開講としたのが特徴です。更に「農の学校」ではJAがコーディネータ役として農の学校の講師を担当し、市は援農受入れ農家と援農市民との環境造りの橋渡し役を担当している。また、活動が沈滞化ないようにアンケート(年1回)をとり援農活動の活性化を行っている。

「農の学校」を卒業してもスキルのバラツキがあるので、1年間は研修農場(市民農園)で実践を通して腕を磨き、技術が均一化されてから援農活動を行うシステム(インターン制度)としている。今後は、農家の繁忙期にスポット援農(有償)ができないかを検討している。

さらに、「農の学校」の修了生の受け皿として、「NPO法人日野人・援農の会」があり、援農を必要としている農家へボランティアを派遣している。



私の好きな古里の景色、虹の松原(玄海国定公園)。日本三大松原のひとつ(特別名勝)。唐津市鏡山展望台からの眺め

2.課題

- ・農家と援農とのニーズをマッチングさせるには援農者の技術力UPが欠かせない。
- ・今後10年間を継続できるシステムにするには、「農の学校」への入学者数確保と受入れ農家を増すことであり、PR(一声運動)が必要。
- ・農家の耕作地面積減少傾向を抑制するには農地法改正で都市型農業を維持できる法的(条例)整備が必要。

3.感想

日野市の援農は、市とJA及び受入れ農家とがうまく連携されて機能している印象を強く受けました。援農は受入れ農家との協働作業ですので、関係部門とのコミュニケーションが必要とされます。

また、受入れ農家のニーズを全てマッチングさせるにはボランティア活動としての難しさもありますが、緑多い農風景が減少傾向にある都市型農業を後世に維持してゆくには、どのような行動ができるかを考えるよい機会になりました。

震災・原発関連の図書紹介

『被災ママ812人が作った子連れ防災手帳』

つながる.com編 KADOKAWA



これは題名どおり東日本大震災にあった母子の体験談が語られています。そして震災に対する心構えや非常持ち出し袋の準備などが書かれています。

例えば、勤務先で、あるいは孫を預かっている時に震災にあう場合を想定して、保育園や親への連絡方法を決めておくなどは、私たちも前もってやっておく必要があります。

特に興味がひかれたのは、「親子防災訓練」という章の①防災ごっこ…停電を想定して、ロウソクを灯し、家族でゲームなどをして夜をすごす。

②仮設住宅での暮らしを想定して、
a、1日の食事をお結びだけですませる。
b、和式トイレに子供を慣れさせておくなど、今からでもできる例を示している点です。

そしてなにより驚いたのは、非常持ち出し袋の中身は、阪神大震災や新潟中越沖地震のときに提案されたものとほとんど同じだということです。過去の情報は大切に活かされなければならないと痛切に感じました。このように若い母親だけでなく、どなたが読んでも参考になる内容が満載です。ぜひ、ご一読ください。(梅沢みどり)

山と山小屋の環境対策

私は、友人夫妻に誘われて1975年(S50年)に初めて南アルプス夜叉神峠に登った。その最初の登山から、ちょうど40年がたった。

その間、山と山小屋の様子が大きく変貌した。山小屋の電気はランプからディーゼル発電機へ。さらに近年、尾根筋では風力発電、沢筋では小規模水力発電、山小屋の屋根上には太陽電池。そして、風力・太陽光のハイブリッドシステムなどもある。

トイレといえば昔はほとんど垂れ流しだった。便槽もなく、山の斜面や谷川に放流した。一旦便槽に貯蔵しても、秋の小屋閉めの時に便槽内に水をためて一斉に放流する。その最たるものが、かつて富士山などで見られた「白い川」である。トイレトーパーの色から、そう名付けられた。当時、環境・衛生・景観面から大きな社会問題となっていた。

しかし、現在では環境配慮型トイレや公衆トイレが普及している。主なものには焼却型・バイオ型(オガクズやかき殻を使った微生物処理)・(ヘリによる)内容物輸送型などがある。これらのトイレはほとんどチップ制(100円~200円程度)である。さらに携帯トイレもある。新設の山小屋では、簡易水洗トイレやウォシュレット付きの洋式トイレもある。

登山者のゴミ持ち帰り運動は、かなり以前から徹底している。しかし、山の裾野などへの不法投棄の問題がある。この対策には行政や市民団体による清掃活動、不法投棄パトロール隊の設置が必要。富士山では、「世界文化遺産登



高尾山 山頂直下の2階建てトイレ 撮影日平成27年3月1日
録」を機に行われている。また、廃屋の問題もある。山道を歩いていると時々朽ち果てた廃屋(山小屋、住居、物置小屋等)が目にはいる。きわめて景観上問題がある。所有者に撤去させるか、所有者不明のときは公費で対応する必要があるだろう。

ちなみに近場の高尾山では、様々な団体が清掃活動をしている。私も参加したことがあるが、清掃活動に参加してもほとんどゴミがないことがある。ゴミがないのがっかりしたこともある(これは、うれしいツイート)。さらに、山頂近くの3年前に完成した和風の2階建てトイレには、2階(女子専用)と1階(男子と女子用)を合わせて54室ある。都心のデパートのトイレに負けないとの評。一見の価値あり。

総じて、山のかんきょう全般を40年前と比較すると、格段に進歩しているといえる。(葛西利武)

「野川源流自然再生設立準備会」の活動紹介

エックス山を保全・活用し「森の自然塾」、「指導者養成講座」を開催

「国分寺市にふるさとをつくる会」を母体に、平成19年に「野川源流自然再生設立準備会」が立ち上げられた。

生物多様性や緑地保全など、府中かんきょう市民の会とも、課題・問題点を共有していることから、その趣旨に賛同し、当会も準備会に団体として加入している。

今回は、その「国分寺市にふるさとをつくる会」理事長の前島征武氏に活動紹介をしていただいた。(編集部)

国分寺市の中央にエックス(X)山と称する森があります。ほぼ平地ですが、戦後子どもたちの遊び場として、愛着を込めて呼ばれるようになりました。公には「西恋ヶ窪緑地」と呼びます。

平成13年、相続税負担から開発計画が起きました。これを憂い、今は亡き木村成博様の「子孫のため立ち上れ」と遺言のような言葉と奥様の紹介から、同じ地権者の一人故中村栄治様との出会いがあり、その中村様がさらに他の地権者を紹介されるなど、先祖が守ってきた山を保全したい地権者の方々の思いが「保全は了承する」の言質となり、これを契機に発足したのが「国分寺市にふるさとをつくる会」です。

里山(雑木林)として利用されていましたが、戦後は手を入れなかったことから、多種多様な動植物が棲息するようになり、野草が花畑のように咲き、市民の「心のふるさと」です。また、エックス山は野川源流域でもあり、以前に山の東南側に湧水があり、流れ出た水は姿見の池を経て野川につながっています。保水力のある森すなわち、水源涵養林としての価値や生物多様性の地であり、何よりも子どもたちの遊び場として恰好な場所です。



森の自然塾／バードウォッチング

地権者の思いを受けた保全活動は、約1万人の署名をいただき、国分寺市議会で公有地(約1万㎡)の採択をいただきました。続いて、当会は国分寺市から「エックス山の自然林の保全・管理」の委託を一時受けていました。

平成27年度の「森の自然塾」は、毎月第3日曜日の午前8時50分からエックス山の中央で開催しています。森の自然の講師は、私たちが行っていますので塾に参加ください。

その講師とは、仲間たち(法人社員)のほとんどが講座卒業生です。仲間は、「森の教室指導者養成講座」受講者です。この講座は、全国体験活動指導者認定委員会自然体験活動部会(NEAL)の認証を受け、生物多様性・自然環境保全、自然体験活動の技術・指導法、森の安全などを学んでいます。初年度はリーダー、次年度からインストラクターを演習と共に毎月第2水曜日、午前9時に開催します。



森の教室指導者養成講座

受講者は近隣小学校の総合学習支援で、平成26年度6ヶ所の小学校で引き受けました。行事では「自然観察会」「歴史伝承案内会」等行うほか、グリーン・ツアー・ウォークと称し年2回実施しています。今年4月5日は、第27回を迎えて「エックス山めざし野川源流に行く」と題し開催します。

ふるさと会の活動者は、「自然を味わう仲間」が主体であり、かつ、町内会や自治会とも連携を図っています。当会が幹事団体となり、できることは協働し、8団体で合同連絡会会議をもち活動しています。その仲間たちの輪が拡大し、平成19年に総務省から自然再生推進法(平成14年法律148号)第4条の調書をきっかけに現在16団体を擁する野川源流自然再生設立準備会を設立し、毎月2回会合を行っています。

目的は多摩川の支流である野川が毎年のように涸れ、湧水も涸れるなど水源涵養機能の低下と、貴重な動植物の減少を防ぎ、生物多様性をより豊かにするために知恵を出し合い、恋ヶ窪用水を復元し、ホタルも飛ぶ自然再生をめざしています。市民活動団体や個人参加もできますので、ひとりでも多くの準備会の加入が待たれています。

(前島征武)

申込み先は 国分寺市にふるさとをつくる会
前島宅 ☎ 042-322-1964